

7. DAPAカンファレンス症例から見る医鍼連携における課題の明確化 ～鍼灸師の視点から～

吉村 英¹⁾・友岡 清秀²⁾・謝敷 裕美^{3) 6) 7)}・増田 卓也^{4) 5) 6) 7)}・竹下 有^{6) 7)}

1) 吉村はりきゅう治療院

3) 順天堂大学大学院 医学研究科 公衆衛生学講座

5) 東銀座タカハシクリニック

7) (一社) 北辰会

2) 順天堂大学医学部 衛生学・公衆衛生学講座

4) 三井記念病院 総合内科・膠原病リウマチ内科

6) 清明院

【目的】

鍼灸師の医療連携に対する意識は年々高まっている。日本東方医学会では2017年より定期的にDAPA（医鍼薬地域連携研究会）にて鍼灸師、医師を中心に症例カンファレンスを行っており、医鍼連携の有用性や課題が報告されてきた。今回、アンケート調査により、医療連携が良好または不良であった要因を調査し、医鍼連携の課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

DAPAカンファレンスで症例報告をおこなった鍼灸師14名に“医療連携における課題”についてGoogleフォームを用いてWeb調査を実施した。鍼灸師の特性、直近一年の連携回数、連携先の内訳、連携良好・不良の要因を含む27問について調査した。

【結果】

本研究では9名（男性6名、女性3名）の鍼灸師から回答を得た。直近一年の連携回数は「5回未満」が最多、次いで「51回以上」、「11～20回」が同率であった。連携先は「医師」が最多、次いで「ケアマネージャー」、「老人ホーム等施設職員」が同率であった。連携が良好であった要因は「面識があった」、「情報共有が出来ていた」、「鍼灸治療について説明し、理解が得られた」が同率で多く、不良であった要因は「理解がなかった」、「必要性を感じてなかった」、「リスクへの意識が強かった」、「紹介状を渡してなかった」、「報告書に無反応」が同率で多かった。

【考察】

本調査から、連携が不良となる要因に「鍼灸治療への理解と関心の欠如」、「説明と情報共有の不足」が挙げられた。良好であった要因に「面識がある」、「十分な情報共有と説明」が挙げられた。医鍼連携において、鍼灸師は、十分な情報共有と説明を前提に顔の見える関係の構築を図り、治療内容への理解を得ることが重要であり、鍼灸治療に対する心理的障壁が高い場合は情報共有の継続に留めることも必要と考える。

キーワード：DAPAカンファレンス、医鍼連携、アンケート調査

8. 「気ってなんですか」～医学生が考える患者さんへの説明の模索～

濱口 哲¹⁾・平山 大徳¹⁾・廣田 華実¹⁾・友岡 清秀²⁾・谷川 武²⁾

1) 順天堂大学医学部

2) 順天堂大学医学部 衛生学・公衆衛生学講座

【背景】

気は東洋医学的世界観の源であり、その理論の根幹をなす概念である。学生として東洋医学を学習する中で、基礎理論を学び、弁証論治の概念まで理解できるようになった。しかし、そのすべての基礎となる気について自分たちは本当に理解できているだろうか。例えば、もし将来我々が東洋医学を用いる医師となって、患者さんに「気ってなんですか」と聞かれたら、果たしてちゃんと答えられるだろうか。そもそも気の定義は多義的であり、しばしば抽象的でつかみにくいものとして認識されがちである。また、東洋医学を実践する医師・鍼灸師・武術家など気を取り扱う職業の方々の間でも、個人レベルで認識の差がある。どんな患者さんにもわかりやすい気の説明を提案したい。

【目的】

患者さんの「気ってなんですか」という問いに対する答えを考える。多様な背景を持つ患者さんにわかりやすいような説明を練る。

【方法】

本研究では、気の捉え方について文献検索を行う。東洋医学の古典や現代の専門書や論文から、鍼灸・漢方・気功・武道・宗教など、多様な実践領域における気に関する見解を収集する。各領域における、気の位置づけ・機能・前提に着目し、整理・比較することで、「患者さんのための気の説明」について考察する。

キーワード：気、漢方、鍼灸、医学生

9. 氣圧トライアルが血圧と自律神経系機能に及ぼす影響 —健康成人を対象とした探索的研究

岩崎 真実¹⁾・野村 勇貴¹⁾・牟田 美慧¹⁾・友岡 清秀²⁾・谷川 武¹⁾

1) 順天堂大学大学院 医学研究科 公衆衛生学講座

2) 順天堂大学医学部 衛生学・公衆衛生学講座

【目的】

近年、高血圧の有病率は依然として高く、更なる対策が求められている。心身統一合気道で行われている氣圧は、施術者が身体に触れて適度な圧を加える手技であり、姿勢の確認、呼吸法、瞑想法等と併用される。これらには自律神経を介した降圧作用が示唆されているが、氣圧を含むアプローチが血圧や自律神経に与える影響は明らかでない。本研究では氣圧の要素を取り入れた介入プログラムである氣圧トライアルを実施し、単純前後比較試験により血圧や自律神経機能に及ぼす影響を探索的に検討した

【方法】

19～78歳の健康成人70名に、氣圧トライアルを週3回、4週間実施した。血圧および心拍変動は介入前、2週後、4週後に測定した。心拍変動は、LF/HF比を交感神経、HFを副交感神経の指標とし、対数変換した値を用いた。介入による血圧および心拍変動の変化を反復測定分散分析またはフリードマン検定により検討し、血圧と心拍変動の変化量の関連はスピアマンの順位相関分析で解析した。

【結果】

介入前、2週後、4週後の収縮期血圧の平均値は113.9 mmHg、112.8 mmHg、111.3 mmHg ($p=0.07$)、拡張期血圧は72.4 mmHg、73.7 mmHg、73.3 mmHg ($p=0.18$)、同様に、 $\ln LF/\ln HF$ の中央値は1.05、1.01、1.11 ($p=0.30$)、 $\ln HF$ は4.89 ms²、4.65 ms²、4.61 ms² ($p=0.64$)だった。収縮期血圧の変化量とLF/HFまたはHFの変化量に有意な相関は認められなかった。

【結論】

氣圧トライアルにより収縮期血圧が低下する傾向が示された。一方、収縮期血圧と心拍変動に有意な相関を認めなかったことから、氣圧トライアルによる降圧効果には自律神経以外の機序が関与している可能性が考えられた。今後、無作為化比較試験によりその降圧効果や作用機序の解明が求められる。

キーワード：氣圧トライアル、血圧、自律神経、心拍変動、探索的研究

10. 伊達政宗の16人の医師へあてた直筆書状71通からわかること

尾崎 和成¹⁾・蔭山 充^{2) 3) 4) 5)}・白井 義貴¹⁾・伊東 範尚¹⁾・中村 好男¹⁾

1) 市立伊丹病院 老年内科

2) かげやま医院

3) 大阪市立大学大学院医学研究科 女性生涯医学

4) 京都大学大学院医学研究科 器官外科学(婦人科学・産科学)

5) 弘前大学大学院医学部

【背景】

伊達政宗(以下政宗)は戦国武将・初代仙台藩主で千通以上の直筆書状を残している。今回、当時の医師宛書状から政宗の伝統医学の理解度や当時の医療水準を推測した。

【方法】

『仙台市史』第10-13号に約四千の展示品・書状が掲載され、このうち当時の医師宛の文禄四年(1595年)以降の政宗直筆書状を元に、国内の文献に加え、インターネットによる検索、外務省のホームページなども利用した。

【結果】

1992年に藩医宛書状28通の報告があるが人文・社会科学的考察のみで医学的考察に欠ける。我々は上記28通を含む医師宛の71通を伝統医学的見地から検討した。宛先は高屋快庵と松庵、半井成近と成信、曾谷宗祐、竹田定宣、野間成岑、曲直瀬玄朔と正琳、今大路親昌、藤林綱久、細川全隆、内田玄勝、岡本玄治、片山宗哲、施薬院全宗の16人である。71通中47通(51症例)が医学関連で政宗はうち20症例は自身を診察していた。今回は2通(3症例)の詳細を示す。症例1は政宗が自身を診断した症例で、症例2は政宗自ら侍女を診察している。症例3は別の侍女を政宗が診察し、侍医に紹介する前にそかうゑん(蘇香圓)を処方している。

【考察】

症例2で従来は「少し動かすと、肺に少し手にあたる脈」の解釈だが、当て字の「敷(しき)」でなく「數(数の旧字)」にとると、「少し頻脈で右寸脈が有力で肺熱の脈」と解釈でき、医学的知識のある者(政宗)が診察していることがわかる。症例3の蘇香圓(蘇合香丸)は、中国国家衛生健康委員会の新型コロナウイルス感染症ガイドライン(Trial 8th Ver.)では意識障害に適応があるが、本症例では適応疾患は異なるが、政宗は蘇香圓を即時使用が可能な状態にしていたと推測された。

【結論】

複数の書状および同時代の文献から、政宗は軍事政治的な名君主のみならず後世派の医学的知識に富んだ武将だったと推測できた。

キーワード：伊達政宗(DATE Masamune)、漢方(Kampo)、書状・手紙(Letter(s))、脈診(Pulse-taking)、蘇香圓(蘇合香丸)(Sokoen or Storax Pill)